
魔法少女リリカルなのはStrikerS 2人の青年

暁 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 2人の青年

【NNコード】

N5168S

【作者名】

暁零

【あらすじ】

平凡な学生生活をしていた2人の青年。だが、いきなり理由も無く謎の宝石により飛ばされ、気が付いた場所は、異世界ミッドチルダ。

そこで一人の青年は、高町なのは（ヒースオブエース）をはじめとする機動六課の面々と出会い、共に戦う事で搖るがぬ「絆」を作っていく。

一方で、もう一人の青年が出会ったのは、「無限の欲望」と謳われた危ない科学者と、個性溢れた12人にも連なる姉妹達。そして

正義を倒すべく彼らに協力をする青年。
かんりきょく

白と黒。敵と味方。
互いに正反対の立場で、戦いに身を投げる
一人の青年。

彼らの行く果てにあるモノは？ 互いにぶつかり合う“正義と悪の信念”の先に待つモノは？ 彼らの未来に有るモノとは一体？

「魔法少女リリカルなのはStrikers 2人の青年」始まります。

作者の処女作です。二次創作がお嫌いな方、オリジナルキャラ介入が嫌いな方は回れ右をお願いします。初心者ですので、誤字脱字・設定の間違いなどは考慮してお読みください。拙い部分もありますが、よろしくお願ひします。不定期更新になりがちですが、よろしくお願ひします！

プロローグ（前書き）

初投稿、初の処女作です。他の作者様達に影響されて連載を開始しました。

つたない部分もありますが、よろしくお願いします！

プロローグ

……………。

田舎まし時計の音が部屋に響く。

時計は、朝の8時を指し、窓からは忙しく動く会社員や学生の姿が見える。

「う・・・ううへん・・・・・

そんなりめき声が一つ。

眠り足りないのかそれともまだ寝ぼけているのか、彼のみぞ知るで
あるが、

ベッドから抜け出した彼はのそのそと鏡に向かい、自分の顔を見る。

寝ぼけ眼のまま、洗顔をし、髭を剃る。

「・・・・・・・ん、バツチリ・・・うーん・・・良い朝だ・・

・

何て事を呴きつつ、マーガリンを塗ったトーストをもつさもつさとかじるのは、短く切った茶色がかつた黒髪に目覚めた直後なのか、ジト目気味だが明るい空色の眼をした青年。

パツと見て「明るいムードメーカー」と称されるかのような彼 - - - - -

あまとカケル
天斗翔

大学2年目に入ろうとしている青年である。

ヴィーン・・・・・・・・・・・・

彼は、ケータイのメール受信を確認し、画面を開く。

「Who? 誰? ヒトのモーニングタイムを邪魔する外道は・・・。俺が直々に筋肉バスターをかけて蠍人形にしてやろうか?」

この男、まだ寝ぼけているのか、何か色々と危ない発言をしつつ、画面に目を移す・・・

「んあ? 今日大学が休講? うーむ・・・・・・・・・・・・

少しの間、考える素振りを見せた男はポンと手を打つた。

「そうだ。遊びに行こう。あ、でも独りだと何かさびしいから、アイツ誘おうか・・・・・・・・

と言い、早速誰かに電話をかける翔であった。

Another Side

ジリリリリ・・・・・

日覚まし時計の音がアパートの部屋に響く。

ジリリリリ・・・・・

シリリリリリリリリ

— N N N

ジリリリ・
・

「五月蠅い」・・・・・

ボチ。

布団から飛び出た手が、力無く時計のアラームを切る。

「う・・・・・あ・・・・寝まいな～コンチクショ～。 飲み過ぎて
チャンポンしちまつたか・・・？」

力無く窓のカーテンを開け、力無くベットから降りて、力無く手洗い場の鏡に向かい、ゆるゆると洗顔と髭を剃つていく「彼」。 そして、最後に鏡を見て前髪を搔き上げつつ一言。

「さて。 今日も頑張るとしようつか・・・」

肩より少し長いややセミロングな黒髪を後ろで縛り、切れ長の鋭い、意志の強そうな「鷹の田」とも呼ばれるかのような黒い眼を持つた青年。

蒼月竜哉
そうつきりょうざ

彰と同じ大学で高校から付き合いのある親友である。 ちなみに、歳は同じ。

だが、今の彼は寝癖ビジト田が半端ないほど酷い有様になつてている。

ピリリリリ・・・

携帯のアラームが鳴る。

「・・・・・・・・・・・・・ああん？（怒）」

「誰だ・・・・？ オレの眠りを妨げる奴は・・・・？ ヒネリ潰そ

うか・・・?

という物騒な事を言いつつ、画面に田を移す。

「ん・・・・? 電話・・・・? 彩から・・・・?」

パ
力

「もしも…・・・・・」

『おーーーはよーーーうーー！竜哉君！今日も良い天氣だ・・・・・』

ブツツ
ポイツ
ゴロン。

・・・・・見ていない！

あれだ。これは・・・そう、單なる幻聴だ。
ほど飲み過ぎたんだ。

はつはつは！ オレのうつかり者め！

さあ、今すぐ携帯を置いて、温かいベッドにダイブして寝なおそう

•

ガシツ
カチツ
ピツ

「……………もしもし？」

『わ～～ん。俺が悪かったよ～～～ だから話聞いてくれよ～～～！』

「だが断る。」

『何でぞーーっ。』

「だるい。めんどい 酔つた。うざい 寝まい 精神的に受け付けない。」

『酷ツ～！？ てか話を聞いてからにしろつてーーー。』

「……………ハア。 で？ 何の用？」

『大学が休講になつたんだよ！ つー事で、やること無いし遊びにでもいかないか？』

「……………切つても良いか」

『わ、解つた！ ふざけないから切るなー。』

「はあ……………解つたよ。 で？ バーに行くのや～。』

『駅前に新しい店できたからそこに行こうぜーーー。』

「ああ・・・あの噂の店か。」「解。じゃ、後でな。」

ビッ

「・・・・・・・・・・」身支度するか・・・めんどいけど

と、言いつもまんざらではない顔をして身支度をする竜哉であつた・・・

「で? 場所どこなんさ?」

「え~と、確かにこの辺に・・・」

「おいおこ・・・・・そんなおぼろげで大丈夫か?」

「大丈夫だ。問題無い」

「・・・・・・・・・・」

「わ、解つたから、、その殺氣だつている手と握りしめている拳をやめてくれー!」

場所が変わって新都。

喧騒と人の行きかいが目立つ摩天楼の下に、翔と竜哉が並んで歩い

ていた。

服装は、翔は七分の黒いズボンに大きめの黄色いバスケットウェアの上に、フードが付いたノースリーブ形式の白いガウン。エメラルドブルーに輝くチーノネックレスと右手中指に同じ色の指輪。

竜哉は、白いノースリーブの上に黒い半袖のジャケットに藍色のゆつたりとしたズボン。

左手に拳大の黒いリストバンドをして、紅色の髪止めて後ろ髪を結っている。

性格は真逆でも、どこか似たりよつたりの一人である。

二人が意気投合し、親友になれたのも、似た者同士だからこそだろう。

「んで？ 何で背中に木刀背負つているんさ？ しかも2本も

翔はジト目で竜哉を見る。竜哉の背中には白と黒色の一いつの木刀を小脇に抱えている。

「単に店見るだけじゃつまらないし。後で河原で模擬戦でもと思つてよ

「うへえ・・・・・。厳しいぜ・・・・・」

「文句言わない。ああ、翔。悪いけど一本持つていってくれ。」

「どっちの方?」

「白の方」

「あいよ。」

「さあ、さつさと探そう。」

「合点承知!」

数十分後・・・・・・

「ここか? 何か薄気味悪いな・・・・」

「まあまあ。 早く入ろうよ」

探し求めて数十分。

漸く場所を見つけた二人。

3階建ての何の変哲もない質屋のような店だが、

いかんせん、何か薄気味悪いを漂わせている・・・・。

「そうだな・・・・。 ん?」

そんな中、道端に何か光るもののが・・・

「ん？ あれは・・・？ おい、翔・・・ 翔！」

「何ー？」

「ちよつと。 これ・・・」

「んー？」

見せたのは、淡く輝く一つの玉であった。

見た目はビー玉と変わらない、何の変哲もない玉。

それぞれ、白と黒に分かれた球となつており、翔が白、竜哉が黒を持つている。

「何なんだ・・・コレ？」

「オレに聞かれても・・・。」

ピカッ・・・・・

「ん？」

「どつたの？ 先生？」

「先生つて・・・。いや、何か光つたような・・・。」

ピカピカツ・・・・・

「見間違いじゃないのーー？」

「でも、確かに・・・・・」

ピカツ！

「「ーー?」」

ピカピカピカツ！！

ピカアアアアアアア・・・・・・・！・！・！

かすかに点滅したと思いきや、今度は激しく光りだす一一つの球。

「な・・・何だこれーー?」

「だから言つたのに・・・・。 とりあえず逃げるぞーー!」

「お、おつー！」

球を放り投げ捨てて、慌ててそこから逃げ出す2人。

しかし、閃光は2人に向かつて迫つてくる。

「翔！ 早くにげる！」

「無理無理！ 何かあれ、俺達の方追いかけてるから！」

「何イ！？」

必死で逃げて抵抗するのも空しく、閃光に包まれていく2人

眩しい光が辺りを照らし・・・・・

光が消えた時

一人の青年が姿を消していった・・・・・・・・・・・

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ベタ過ぎる始まり方で申し訳ありません・・・
こんな感じで捻りがないかもしませんが、これから宜しくお願ひ
します。

次回は・・・

「どうだよ、ここ・・・」

「時空管理局の高町なのはです。 あなたを時空漂流者として保護
します。」

「俺は、あまとカケル天斗翔 気が付いたら此処にいたんだ」

「どう、ここ？」

「私はジェイル。 ジェイル・スカリエッティや」

「オレは、蒼月。 蒼月竜哉。」

次回、「異世界ミッドチルダ 一人の接触」

お楽しみに！

接觸 翔ver.1(前書き)

今回も、難産でした・・・。

それはさて置き・・・！

でわでわ、本編スタート！

10月26日 一部改編しました。

「うう……！」は？」「

翔が意識を取り戻した時、周囲は静寂に包まれていた。
それもさつきまでとは違い、聞こえていたはずの喧騒や賑わいが全
く聞こえない。

しかし、それよりも翔が違和感を抱いたのは周囲の光景であった。

「一体どこのま？……どう見ても新都……紅ヶ原とは違う…
・」

翔は起き上がり、周囲を見回してみる。

そこはあきらかに自分がさつきまでいたとは違っていた。

辺りを呆然と眺め、そしてある事に気がついた。

「やつだ… 竜哉は？！ 竜哉！ 竜哉！」

翔はさつきまで一緒に居た筈の親友の名を呼ぶ、しかしそれに答える者はなく、周囲にそれらしき影も見当たらぬ。

「竜哉とはぐれてしまつたな…。そうだ！ 携帯を… け…

・ 圏外！？」

「嘘。ここ電波ないのかよ！？」

あちらこちらへと、携帯をかざす翔。

「弱ったな……。」

携帯をかざして数分後溜め息混じりに悪態をつきつつ胸元に仕舞いつつ、ちらりと所持品を見る翔。そこには、彼の携帯と竜哉から渡された白塗の木刀、多くは無いが十分の金額が入っている財布、

そして、隅に転がっている、先ほど拾った白い球しか無い。拾い上げて翔はつぶやく。

「……この球のせい……なのか？」

「何なんだ……？　こいつ」

でも、と咳き、頭を搔く翔。

「連絡手段が無いしな……。どうしようか……。ん？」

改めて、周囲を見回す翔。

辺りは埃っぽく、薄暗い。それでいて、どこか朽ち果てられたビルの室内に居るようだ。

窓へと歩んで行き、眺める。所々まばらに、ビルはあるものの、翔自身が居るビルと何ら変わらない形状をしているようだ。

「廃棄都市……か何かかな？」

正直、漫画みてえだと　咳く竜哉の声が入つ子一人いないビルの室内に、翔の声が響く。

「もしかしたら、下に行けば誰かいるかも……。そうとなれば早速行つてみますか！」

思いだつたが吉田と、翔は近くの階段へと向かい、下へと歩いていった。

コツツ　コツツ　コツツ　・　・　・

誰もいないビルの屋内に、靴の音が響く。

「……………やっぱ誰もいない、か…………」

人っ子一人いないビルに、翔の声が響く。

と、そこで何か物音が響いた。

「あれは・・・・・」

音が鳴る方へと走つていく翔

「な、何だ　こいつ？　一つ目オバケか？」

翔の前に現れたのは、丸みを帯びた、そう、ちょいど卵のようない形に、真ん中にカメラらしきモノを搭載したへんてこなロボットだった。

微かに、機械音を鳴らしつつ、カメラから光線を放ってきた。

「うわー？」

慌てて避ける翔。光線は、留まるひと無く翔へと襲いかかる。

「じりやら、話聞くよくな状況じやないし……」

「やめつせやない、か！」

諦めが混ざった台詞を口にしつつ、右手に近くに転がっていた鉄パイプを持ち、腰に木刀を下げる。

財布等は邪魔にならないようバッグに詰め、脇へと放る。

「おひあー」

上段から、両手でを持ち、思いつきりロボットの頭上へと振り下ろす。

が、しかし……

「クソ、固になこいつ……」

余りの固さに、少し手が痺れる。

もつ一度振りかざそうとしたその時にー。

パキーン！

「う、うわー？」

そんな、鉄パイプが折れた！？

ロボットの余りの装甲の固さに、鉄パイプが先に音を上げた。
いや、翔の背丈ほどあった鉄パイプは、半分に裂けて、腰辺りまで長さになつていて。

好機と取つたのか、ロボットの攻撃はさらに苛烈を増していく！

必死に攻撃を避ける翔。

「こちかばちか・・・・・」

：

ウイーン・・・・・

ロボットは光線を放出するのを辞める

ロボットの動きが止まり、辺りを見回す。

辺りは、先ほど光線により、砂埃が立ち、視界が悪くなっている。

カキイン！

「！？」

後ろから何かが当たる音。

ロボットは後ろを向いて、光線を放つ。

しかし、そこに有つたのは、先ほど自分が壊した鉄パイプのみ。

そして、次の瞬間――――――

「せーのつ――」

ズガソツ！

何かが突き刺さるような音が響いた。

ロボットが見たのは、

倒したはずの相手が、正眼に構えた木刀を、

カメラアイへと突き刺した翔の姿だった。

ザザツ・・・・・ ザー————・・・・・

カメラにノイズが走り、ロボットは活動を停止した・・・

ズルツ・・・・・ カツンツ・・・・・

「じほつ じほつ・・・ や、やつたか？」

木刀を引き抜き、付いた油を払い、壁にもたれて息を吐く翔。

体のあちこちから血が流れ、服は埃でボロボロ。

幸い、重傷は負つて無くとも、木刀を杖代わりに床に突き刺し、息も荒い。

ロボットの方は、バチバチ放電こそすれ、取り敢えずは襲つてこなさそうだ。

「何とか倒したな・・・でも、こいつ機械だつたのか・・・」
「どうが、一体こいつは・・・・・・」

ガシヤガシヤガシヤ！

「チイ・・・・・・！」

「さつきの奴と同類か？」次から次へと・・・・・

傷を負つた身体に鞭を打ち、木刀を構える翔。

「面白H…………かかつてこいよ！」

そう言い放ち、ロボット達へど躍りかかつた。

翔が口ボット達へ躍りかかって約2時間程経過した頃

先程よりも傷が多くなつており、右肩と左足にかんしてはかなり赤くなつてゐる。

やや足を止めて、動いておつ、どうせひるが貴通したようだ。

そんな翔の姿にも関わらず、ロボットはまるで多くなつてしまつておつ、数はおよそ30体はいるだう。

「クソ、しつこいな・・・・・・」

まあ良い、纏めて・・・・・

ぼろぼろの状態にも関わらず、額から血を流し、左目を薄ら赤くさせながらも、木刀を正面に構える翔。

「ぶつ潰す！！」

せりて、斬りかかわつとした時 - - - - -

1
!?
[

頭上から桃色の丸い弾がロボットに襲いかかり、殲滅してゆく。

「ふう、危なかつた。駄目だよ、ここは関係者しか入れない所なんだから」

聞こえてきたのは、若い女の声。

頭上を見上げると、白を基調とした服を纏い、杖らしきモノを携え、栗色の髪をツインテールにした女性がいた。

・・・・・田に浮いたままで。

「えーと・・・。Who are You? てか、何で宙に浮いてんだ・・・・?」

至極当然の事を口にする翔を背に、ゆっくりと床に降り立つ女性。

「ふう〜、よかつたあ〜! ビルの中で魔力を観測したってはやっちゃんから聞いたから、ガジェットに襲われているのかと思つたけど、ビックやら間にあつたみたいだね!」

思わぬ人物に翔が驚いていると、少女が翔の下に駆けつけてくる。

「そこ」の貴方、大丈夫ですか・・・」

女性の言葉は途中で止まる。

何故なら、・・・

女性に、木刀の切つ先を向けた翔が立っていたからだ。

接觸 翔ver.1（後書き）

くそう・・・・・一話で終わらなかつた・・・・・o r z

もう少し、プロローグは続きます。

まだ、もう一人の「彼」がいますしね・・・・・！

不定期になりがちですが、読んで頂けると幸いです・・・。

なのはと出会い た翔。

そして ! ?

s i d e : n a n o h a

私は高町なのはば、廃棄都市の方へと全力で飛んでいく。

そう、それは、数時間前の事……

魔力反應？

『せや。一瞬やつたんやけど、結構大きい魔力反応があつたんよ』

通信越しに、9歳からの親友であり、所属している「機動六課」の部隊長、八神はやてと話す。

「すぐに消えてしもつたんやけど・・・。流石に無視するには不気味やからな・・・。

本当は、ヴィータかシグナムに任せたいんやけど、生憎一人は本局にお使い中やから……」

「大丈夫だよ はやてちゃん」

通信越しに真っ直ぐはやてを見るのは。

「私が今すぐ出るから。」

強い意志を宿した瞳で囁つのは。

「さすがは、「ヒースオブエース」やな。局内で言われてるのは、伊達ではないよつやな。
ほんならなのはちやん、やつ囁つ事でよろしくなあ～」

・・・・・ つてはやてちゃんから言われたんだけど・・・・・

「」の辺りの筈なんだけどな・・・・・レイジングハート、近くに生
命反応は?」

南東2キロ地点に、人と思われる生体反応を確認しました、S-i

「

先程までの茶色の制服姿ではなく、今はバリアジャケット……アグレッサー・フォームを身に纏つており、茶髪もツインテールになっている。手には十年来の相棒、レイジングハート・エクセリオンが握られており、なほからの問いに即座に答えてくれた。

「ありがとう、それじゃ、急いでか。」

そう言つと、なほは飛ぶスピードをさらに早くした。

周囲の景色はすゞこスピードで流れしていく。

しばらく飛行を続け、先程レイジングハートにサーチしてもらつた廃棄都市付近に到着した。

魔力の持ち主が移動しているのか、微かに遠くに魔力を感じる。

「どうしてんだらつ……」

なのはは辺りを見渡す。何かを探すのにほんし苦労ではあるが、先程のポイントから移動はしていないよつなので、見つけるのは時間の問題だった。

そして……

！マスター！ ガジェット反応をキヤッチ！ 生命反応の近くに！

「ガジェット！？ 場所は！？」

「！」から北西に一千㍍です。行きましょう、マスター！」

「うん……」

さらばに数十分後……。

「見つけた！」

北西に一千㍍。なのはは、廃棄都市にある幾つかのビルの内の一
つにガジェットの群れを発見する。

「ロングアーチへ、ひらりスタートーズ01。六課から北西一千㍍地点
でガジェットを……

ちょっと待つてあれは・・・・・

ガジェットに紛れてて見えづらにけど・・・・・

黒みがかつた茶髪の男の子・・・・?

あの子が、はやてちゃんが言つていた魔力反応?

といづか・・・・生身で戦闘しているー? ガジェット相手にー?

「スター・ズ0-1からロングアーチへ。 ガジェットと戦闘中の青年を確認。

これから、ガジェット討伐と少年の確保に移りますー。」

なのははすぐに六課本部に通信を入れ、状況を報告する。

『了解やー!なのははちやん、ガジェットの討伐と、男の子の確保、お願ひなー!』

「うん、はやてちゃん。」

そつしてなのはは、通信を手早く終える。そして、右手に魔力を集中させる。

右手からはいくつかの魔力弾が形成される。

「アクセル・・・・」

そして · · · · · · ·

—シユーター!

一気にガジェットに向かつて放つた。

11

誤射無くガジェットのみ狙い撃つ桃色の魔力弾。

チラリと見やると、少年は驚いて呆然としている。

『ガジェットの全滅を確認しました。』

「うん。じゃあ、彼の方へと向かおうか。」

愛機の発言に満足げに頷きつつ、なのはは少年が居るビルへと向か

۸۰

「ふう、危なかつた。駄目だよ、こゝは関係者しか入れない所なんだから」

そう言つて声をかけるのは。

青年は、先ほどよりもさらに驚いた顔をして呆然としている。

それをしり目に、なのはは青年が無事な事を確認し、笑顔になる。

「ふう、よかつたあー！ビルの中で魔力を観測したってはやてちやんから聞いたから、
ガジェットに襲われているのかと思つたけど、じつや聞にあつた
みたいだね！」

青年が無事だつた事に喜びつつ、怪我と身柄を聞いつとなのはは青年
年に近づく。

「そこの貴方、大丈夫ですか？」

ギンッ・・・・・・・・

そして、今・・・・・・・・・・

木刀を突き付けられ、戸惑いを見せる女性　高町なのはと、

冷徹な表情を浮かべ、木刀を突き付ける青年　天斗翔がいた。

険しい顔のまま、翔は尋ねる。

「・・・・・助けてくれた・・・のはお礼言つけど。生憎、知らない所に飛ばされて
何がどうなつてているのか解らない今まで話進めないで欲しいんだよ
ね・・・・・。

いつの間にか、知らない場所にいて途方にくれていたとこなんだよ
ね・・・・・。

「

話している言葉は普通。だが、言葉の一つ一つに、警戒しているのがはつきりとなのにはを感じた。

「でもまあ、女の子に会うのは知らなかつたけど。」

「言ひ、疑つよつた眼をする翔。

「つーか、何？ その格好。 コスプレか何か？」

「コスア・・・・ー？」

なのはは固まつてしまつ。

（コスプレって・・・・・）の子、バリアジャケットを知らない？
といふか・・・・・。）

（多少直観はあつたけど、コスプレはキツイなあ・・・・・）

内心、ショックを受け嘆いているなのはあつた・・・。

そんななのはの心境を知らずに、翔は問いかける。

「で？ アンタは敵なの？ 違うの？」

「え・・・・ええつと・・・・・」

翔に尋ねられ、しどろもどろになるなのは。

「まあ、……どうやら、敵、じゃなれやうだし、

ポツリと呟くように言い、クルクルと何度も回し、木刀を腰に下げる翔。

— へんて？ ここが何処で、アンタは誰なのか、説明してくれる？

「え？ えと・・・」にはニッ ドチルダ だけど・・・」

「ミッドチルダ？」
「どうよ、そー。」

「ふえ？」

返ってきた答えに、なのはは素つ頓狂な声を上げる。

「もしかして……」

顎に手を置き、考えるじぐさを見せるな。

「次元漂流者なのがな・・・？」

「次元漂流者・・・って何ぞ？」

数十分後・・・

「すると・・・あれか。話を整理すると、ここは俺が居た紅ヶ原ではなくて、ミッドチルダという異世界で俺は次元漂流者という大きな迷子。でもって、原因は解らないけど、飛ばせれてしまつて、ここにいると・・・。」

「大きい迷子つて・・・でも、そういう事になりますね・・・」

「詳しい事は私たちが調べますから、取り敢えず六課に・・・

「そうだな、解らないままだし・・・」

翔も同意の意を示し、バッグを持ち、なのはの元へ行こうとするも、小さく呻き膝をついてしまう。

「痛ッ・・・・・・

「…? もしかして…・・怪我しているの…?」

なのはが見やると、左肩に血が滲んでいるのがつりすりと見える。

恐らく、ビームに当たったか、ガジュットの攻撃を受けて壁に激突したのだろう。

「こらなの、ただのかすり傷だよ。ほつといたら直ぐ治るし」

気にも留めずに、歩こうとした矢先に

「背負います」

「んなー?」

翔は、驚いて声を上げる。

「ちよ 待てよー 何で背負う必要があるんだ? かすり傷だつて

言つたろ！？

「かすり傷であれ、悪化したら大変だよ？」
それに、私これでも、
「管理局員だから！」

• • • • • • •

あつけに取られて言葉を無くす翔。

女性に背負つて貰うとは何と羨ま s · · · ゲフンゲフン

今、彼のプライドと思考が猛反発しあつてゐる事だらう・・・

しかし、ガジェットと相手どり翔が傷を負ったのは事実であり、彼の体力はほとんどゼロに近い状態になつてゐる。

数分、翔は悩んだ結果・・・

「ん？」

素直に腹負つて眞づかにした。

辺りはだんだんと暗くなっていた。

茜色に輝く夕焼けを背に浴びて、翔を背負ったなのはが飛んでゆく。愛機であるレイジングハートは、待機状態にしているため、なのはの胸元で鈍く光っている。

「あのわ……」

「ん、何?」

ポツリと尋ねた翔に顔だけ動かして反応するなのは。

「……重くない?」

「全然」

「………そつか……」

小さく溜息をつきつつ、なのはの頭越しに風景を眺める翔

「もしかして………気にしてた?」

なのはに言われ、翔はそっぽを向きながら答える。

「あまつにいな・・・・・

「あまつまつた・・・・・・

「・・・・・」

なのははクスリと笑つて、六課を田指した。

接触 翔ver.2(後書き)

や、やっと翔のプロローグが終わった・・・

後半の甘甘な部分は・・・

反省はしている、だが後悔は無い！（え

次回は、本編では無く、出番が少なかった「彼」のプロローグとなります。

お楽しみに！

青年は、エースオブエースと出会った。

そして、同時刻。

もう一人の「彼」も、彼らに出会った。

*少し、書き方に違和感を覚えた為、他の作者さんの書き方を参考に、

実験的に書き方を少し変えてみました。見づらかったら訂正します。

「…………いつ…………てえ…………」

ぶつけた頭を押さえつつ、立ち上がる竜哉。

「どい、じい？」

辺りを見回す竜哉。 じつやら、通路に居るらしい。

「一、翔？ 翔！？」

先ほど今まで居たはずの親友を探し、辺りに呼び掛ける竜哉。

「ちい…………連絡は…………」

悪態をつきつつ、携帯を出し画面を確認するも、すぐにしまつ。

「圈外、か……」

ポソリと呟いた。

そうして、足元に散乱している財布や木刀等の貴重品が入ったバッグと、足元に転がっている黒い球を見つけて、目の前に持ってくる。

「いこつのせいか…………？」

鈍く光を放つ球を見ながら、竜哉は呟く。
そして、頭を搔く。

「…………全然訳わからねえ」

黒い球が原因らしいが、どうして、何故此処に移動したのかが全く
解らない。

「…………取り敢えず、動くと……」

竜哉が歩こうとした矢先、

突然、警報のような音が鳴り響いた。

「……何だ!?」

音は、どんどん大きくなつてゆく。

「オレが…………オレが原因なのか?」

辺りを警戒しつつ、竜哉はポソリと言つ。

もし、原因なら、此処で立ち止まつていると非常にヤバい。

「だとしたら…………」

竜哉は呟きつつ、速足で歩きだす。

脚はだんだんと早くなり、そして、

「I wanna Run away! (逃げるー)」

思いつきり床を蹴って、竜哉は走り出した。

此処はどこで、帰る方法などを考えるのは後回しだ。どう進めば出口に辿り着けるのかなんて、考える余裕も時間はない。とにかく走る。走るしかない！

竜哉は出鱈田に走つて必死に出口に向かう。

やがて、通路の先に一筋の光を見つけた。

「あれが出口、か・・・・？」

根拠なんてない。だが、竜哉には言い知れぬ確信があった。

出口と思われる光に向かって、一直線に走る。

出口まで後数百メートル。

もう少しで外に出られる、と思った時、信じられない事が起こった。

「ー? 何だあれー?」

目の前に見えた物体に、竜哉は驚愕する。

それは、翔がなのはに出会った時にも現れたロボット……ガジェット・ドローン

カプセルをそのまま大きくしたような物体で真ん中に黄色い球体がついている。

しかも、宙に浮いてる。

見た感じは、

「一つ目ポストか……？」

……偶然かは神のみぞ知る、翔とまったく同じ印象を抱く竜哉。

カメラアイを向けるガジェット・ドローン

どうやら、竜哉を狙っている様子らしい。

「チイ……何でかはしらねーけど……」

走りながら舌打ちをし、小脇に抱えていた黒塗の木刀を抜き、逆手に持つ。

ちなみに、貴重品等は背中に背負つたバッグに入れているから問題はない。

「邪魔……」

光線を放つガジェット。 だが……

「 するな！」

竜哉は壁を蹴つてかわし、そのまま、ジグザグに壁を蹴りガジェットに向かい、横なぎに木刀を払う。そして、

閃！

一閃の元、ガジェットを斬り倒した。

斬られたガジェットは、バチバチと放電をしながら、
ガシャアアアアン・・・・・

真つ一つに別れたまま活動を停止する。

チラリとそれを眺め、にやりと笑い出口を手指す竜哉。

そのまま、出口に向かっていく竜哉だったが・・・

グニユウウウウウン・・・・・

突然、右側の壁から一人の女の子が現れた。

「！？」

堅い壁から、人間がすり抜けるように現れたという信じられない現象を目の当たりにして、竜哉は思わず足を止めた。

「つかまえた」

可愛らしい声と共に、女の子は竜哉を捕まえた。

「わっ、クソ・・・離せこの……！」

女の子と体が密着して、竜哉は顔を真っ赤にして興奮と混乱がごつちゃになる。

「セイン！捕まえたっスか？」

すると、走ってきた方から別の女の子がやつてきた。

「捕まえたよ～」

竜哉を捕まえた女の子 セインが後からやつてきた女の子に答えた。

「クソ……！」

歩みを止めていた自身に、捕まつた自分に憤りを感じつつ、竜哉は悪態をついた。

「…………」

出口を目前にして捕まつた竜哉は、セイン達にある一室に連れて来られた。

竜哉を中心に、七人の女性が取り囲んでいる。その中には、あのセインという女の子の姿もあつた。女性はみんな、青と紫を基調としたボディースーツを着ている。

「貴様、どこから侵入した?」

「…………オレもしたくて侵入した訳ではない」

「何だと?」

「…………何か事故みたいな感じで……気がついたら此処にいたんだ」

紫色の短髪をした女性の問いに、疲れ切つた様子で竜哉は答える。

この一室につれてこられてから、一時間程、緊迫した状況が続いている。

(クソ…………何だよ!)。 周りは皆女子ばかりじゃねーかよ。

。

落ち着いている表情をしつつも、内心焦りを浮かばせている竜哉。

(どうする? ここにいたら埒が開かないし、いつそ纏めて氣絶させてからずりかかるか……?)

竜哉の手が僅かに木刀へと伸びようとした刹那

- - - - -

「プシュー——

「やあ、待たせたね」

そこへ、白衣を着た紫色の髪の男がやってきた。男の隣には、薄い紫色の長髪の女性が立っている。

竜哉は一旦木刀へと伸びた手を下ろし、男の方を見つめる。

もちろん、警戒は怠っていない。

「自己紹介が、まだだつたね。私はジエイル、ジエイル・スカリエッティ。隣にいるのは、私の秘書をしてもらっているウーノだ」
白衣の男　　スカリエッティが、自分と隣にいる女性　ウーノの紹介をした。

「・・・・・・蒼月竜哉だ。」

竜哉も少し頭を下げて、自己紹介した。

「それにしても・・・・・」

「ん、何だい?」

「……………ジエイル・アリエッティとは……

随分とまあ、可愛い名前だな。」

「んなつー…?」

スカリエッティは驚愕して固まっている。

「違う! ジエイル・スカリエッティだ!

「え 何だつて?」

「スカリエッティ!」

「とんでもねえ あたしゃ神様だよ!」

「ふざけているのかね!?」

「良く解つたな

「いたのかい!?」

と、何故かそんな漫才のようなやりとりを始める竜哉とスカリエッティ。

周りにいた女性たちは何名か除き、ポカーンとしたまま固まっている。

そんな彼の姿にさらに追い打ちをかけ、

竜哉は大きさに頭を抱える。

「なんて事だ・・・。まさか、ジ〇リ作品のアリエッティ以外にも、同じ名前がいたとは・・・。」

天変地異の前触れか?」

「だから、ジェイル・スカリエッティだと・・・。」

「えええと息を吐くスカリエッティ。」

「まあまあ、そんなにカツカとしなさんな。」

「誰のせいかね 誰の!」

「ドクター! 落ち着いて!」

「んで、何か言いたかったんじゃないの?」

「ああ、そうだったね・・・。全く君は・・・。」

咳払いをして、話しあうジェイル。

「キミが拾つた黒い球を調べたよ。どうやら、コレは時空移動型のロストロギアのようだ」

竜哉から受け取った黒い球をかざしつつ、スカリエッティが言った。

時空移動型？　いやその前に・・・

「ロストロギア？」

聞き覚えのない単語を耳にして、竜哉は首を傾げる。

「次元空間の中には、幾つもの世界が存在する。ロストロギアとは、簡単に言えば他の世界よりも進化しそうした世界の危険な技術の遺産。種類にもよるが、中には次元空間を滅ぼす程の力を持つた物もある」

スカリエッティの説明を聞いて、ポカンとなりつつもどこか納得した表情を浮かべる竜哉。

要は、古代兵器と言つたところか・・・。

まるで漫画みたいな代物だな　　といつのが竜哉が抱いた感想だった。

「このロストロギアとキミの所持品などを調べた結果、キミは別の・・・いや、異世界からきた『次元漂流者』であると判断した。管理局と疑つて、すまなかつたね」

その言葉を聞いて、竜哉は小さく息を吐いた。

部屋に連れて来られた時から『貴様！管理局のスパイか！？』と散々問い合わせられた。

管理局とこう組織がどうこうモノか解らない竜哉は、とにかく自分

は管理局の人間ではないと主張し続けた。

異世界へやつってきたなんて未だに信じられないが、此処へやつてきた原因が解り、誤解も解けた。

「いや、謝る必要は無い。 疑うのは当然だろう？ それに、まあ、誤解も解けたからイーブンて所だしな」

「それは良かった」

満足げに笑みをするジエイル。

「これでやっと元の世界へ帰れる。 翔にも会えるだろ？」

そう思つて竜哉は、口を開いた。

「じゃあ、その黒い球をもう一度使えば、元の世界に帰れるんですか？」

「……非常に言い難いのだが……」

と言いながらも、スカリエッティは全く困つた様子をしていない。むしろ笑みを浮かべていた。

「このロストロギアは、魔力が空になつていてる。どうやら、一度限りの使い捨てのようだ」

「て事は……」

「ああ キミは、元の世界には帰れない」

さらりとスカリエッティが言った。

「それに、帰るとしても、これだけでは無理ひしげ。」

「…………？　どうこうの事だよ？」

首をかしげながら、ジョイルに問う竜哉。

「どうやら、この球は一球一対らしいね……この黒い球と対をなす球を見つけて、調査しない限り、君はずっと帰れないだろ？」

スカリエッティはそう説明する。

それに対する竜哉の反応はとこりと。

「はあ……そうか」

特に落ち込んだ様子もなく、素つ気ない返事をした。

オレの反応が思っていたのと違つたのか、スカリエッティは片眉を上げた。俺を囮んでいる女性達も、意外そうな表情をしている。

「……感想は、それだけかね？」

「ああ」

「ショックではないのかね？」

「…………全くないと言えば嘘になる。」

竜哉は、しばらぐ口を噤んだ後、話し出す。

「けど、あまりショックはない。元の世界に未練はないしな」
オレの答えを聞くと、スカリエッティは、感心しつつもむうと眉をしかめてくる。

「どうやら、

「ただ……」

「ん？」

「多分、そのロストロギアって奴に飛ばされた親友がいるんだけど…」

天斗翔といつも前に心当たりはないか？」

「ふむ・・・・・・」

しばらく考える素振りを見せるスカリエッティ

「残念だが、聞いたことがないな」

その言葉に、少しうつむく竜哉。 やがて、顔を上げる。

「そうか・・・・・ 協力、感謝するよ スカリエッティ」

「これから、どうするんだい？」

「・・・・・・・ あての無い旅でも始めようかな」

寂しげに、呟くように答える竜哉。

行くあてが無くとも、まあ何とか生きていけるだろ？

竜哉がそんな事を思つていると、スカリエッティは何か思いついた
らしく、ニヤリと笑みを浮かべた。

「竜哉。私たちと一緒に、此処に住まないかい？」

「は？」

スカリエッティの突然で意外な提案に、竜哉は間抜けな声を出した。ウーノや周りにいる女性達も、驚いた顔をしている。

「ドクター！本気ですか？」

竜哉を取り囲んでいる女性の一人が、スカリエッティに聞いた。

「もちろんぞ」

笑みを浮かべながら即答するスカリエッティ。

呆然としていた竜哉は、ハツと我に帰り質問をする。

「…………どうしてオレが一緒に住まなくちゃいけないんだ？」

「この場所を、他の者に知られる訳にはいかないからだよ」「それだったらオレの記憶の中から、此処に関する記憶を消して、外に出せばいいじゃないか」

竜哉がそう言つと、スカリエッティは口元を吊り上げて笑みを作つた。

「ふむ。私はそれでも構わないが、キミはいいのかい？」

「何……？」

何となく嫌な予感がして、竜哉は思わず険しい顔をする。

「外に出て、この世界に来たばかりのキミに衣食住のアテはあるのかい？」

「…………」

言われて竜哉は、顔を少し俯ける。

確かに、此処を出たら他にアテはない。一応お金は持つているが、世界が違うから多分使えない。

「それとキミは、記憶の消去を提案したが、下手をしたら全ての記

憶を失う事になるかもしないぞ？いや、それどころか私はキミの記憶をいじつたり、他にも様々な実験を試みたりするかもしないぞ？」

「……っ！」

スカリエッティの言葉に、竜哉はバッと顔を上げ、スカリエッティを睨む。

つまり、自分という存在をスカリエッティに思つように弄ばれるという事だ。

スカリエッティは、実に楽しそうな笑みで竜哉を見ている。

・・・・・なるほど、こいつ。

よほどマッドサイエンティストらしい・・・

さつきの弄り甲斐とは違つて、生糞の・・・

先ほどとは違い、不敵の笑みを浮かべる竜哉。

選択肢は一つ。スカリエッティに従つて此処に住まうか、スカリエッティの実験体になるか。

「……此処に住むつて言えば、オレに危害は加えないんだな？」

「ああ。その代わり、キミには雑用をやつてもらうがね」とスカリエッティが答えた。

正直、此処に住む事にも不安はある。が、実験体になるよりはまだマシだろう。

そう考へて竜哉は結論を出した。
「此処に泊まらせてくれ」

竜哉が頭を下げた。

「我が秘密基地へようこそ、蒼月竜哉」

スカリエッティは、両手を広げて竜哉を迎えた。

周りにいる女性達の何人かは、まだ納得していない感じである。

「それじゃあ……チング。キニが、彼を部屋まで案内してくれたま
え」

「はい」「

歳は十歳過ぎくらいで、背が低く、銀色のロングヘアで、右目に黒
い眼帯をついている少女、チングが答えた。

「竜哉さん。お荷物お返ししますね」

「どうも」

竜哉は、ウーノからバッグを返してもらつた。
「では行くぞ」

「あつ、ああ」

呼ばれて竜哉は、チングの後ろに駆け寄つた。

スカリエッティの研究室を出て、チングは竜哉を連れて通路を歩い
ていた。

「着いたぞ」

二人は、竜哉が使う部屋の前に着いた。
扉を開けて、部屋の中に入る。ベッドと机だけといつ、余計な物が
ないスッキリとした部屋だった。

「私の部屋はすぐ近くだから、何かあつたら呼べ」

「……」

竜哉は返事なく頃垂れている。

「いつまでも落ち込むな。男だろ？？」

そう言って、チングは微笑んだ。

チングの微笑みを見て、竜哉は笑みを浮かべる。

「ああ……すまない」

「気にするな」

そう言つて、チングクは竜哉から離れた。

「ああ。自己紹介がまだだつたな。私はN.O.・5のチングクだ」

「N.O.・5?」

チングクの自己紹介に、竜哉は首を傾げた。

「ああ。私達は『ナンバーズ』といつ、ドクターに造られた『戦闘機人』だ」

「ナンバーズ？ 戦闘機人？」

またも、聞き慣れない単語が出てきた。

「まあ、そこら辺は後で説明しよう。もうすぐ夕食だから、部屋で休んでおけ」

そう言つて、チングクは部屋を出でていった。

部屋に一人残つた竜哉は、ベッドの上に座つた。そして横になり、今までの出来事を思い出す。

駅前で、ロストロギアと呼ばれる黒い球を拾つてこの世界にきた。ナンバーズと呼ばれる女性達と出会つた。もう元の世界に帰れない。他に行くアテはなく、彼女達と一緒に住む事になつた。

そして、未だに翔と会つていない。

「オレは……此処でやつていけるのか……？」

胸に不安を抱いて、竜哉は小さな声で言つた。

「翔……お前……」

「今どこにいるんだよ……」

呴いた言葉は、静かに闇へと消えていった。

もう一人の青年は、出会った。そして、親睦を深めてゆく。

「戦闘機人？」

「アタシは……戦う事しか知らない」

「こ、こよ。相手になつてやる」

「ふむ、どうやら君にも、魔力があるらしいね。」

次回 「接触 竜哉ver・2」

・・・・・・・・・・・・早く本編書きたいイイイイイー！ー！ー！

読者の皆さま、しばしお待つけを・・・・！

紡がれたのは、一人の青年の決意。

夢を見た。

親友が、自分が届かない程に遠くに行ってしまう夢を。

「翔ツ！」

ガバリと身を起こした竜哉。

息は荒い。冷や汗が、背中を伝う。

「大丈夫か？」

ブシューと扉を開ける音がして、入ってきたのは

「チンク・・・さん」

「うなされる声が聞こえてな、それで、体調は？」
眉を潜め、心配そうに見るチンク。

それを見て、ぎこちない笑みを見せつつ、返答する。

「今のところは、大丈夫です」

そうかとチンクは静かに言い微笑む。

「ついてこい、他の面々に会わせる」

場所が変わり、食堂。

竜哉とチンクが到着した時には、もう他の面々が集まっていた。

「それじゃ、紹介するぞ」

チンクが音頭を取り、紹介を始める。

「改めて私から。Ｚ〇・5のチンクだ。何か分からないう�がある

たら私に言つといい。よろしく頼む」

小柄な体躯に似合わず大人の雰囲気を持つチンク。澄んだ金色の
隻眼に光を反射して輝く白銀の長髪。

皆のまとめ役的な感じがする。

「Ｚ〇・3のトーレだ」

紫色のショートヘアに切れ長の瞳のトーレ。何か、リーダー的な感じがする。

チングと似たような立場に見えるが・・・

チングが「柔」なら、トーレは「剛」のリーダーと言つたところか・

・・

金色の瞳と一度交わされた視線は、興味なさげに外された。

「Ｚ・４のクアットロですわ ふふつ、よろしくお願ひします
わね」

栗色の髪を両脇で結び、眼鏡をかけてる女性が、クアットロ。
なんだかとっても楽しげ。あれ? 今、クアットロと言つたよな
? まさか・・・!

竜哉はビシイと指を指して言い放つ。

「ぐ、クアットロ・バジーナか!?」

「クアットロです!」

ボケをする竜哉に、クアットロから盛大なツッコミが入る。

「Ｚ・６のセインだよ。よろしくね」

水色セミロングのセイン。その瞳からは好奇心が窺え、明るい方な
のだという印象を受ける。

「・・・Ｚ・９ ノーヴュ」

赤色のショートカットのノーヴュさん。鋭い目つきでオレを睨んで
いる。

此方は冷静に冷徹にその視線を受け流す。

「Ｚ・10 ディエチ……」

栗色のロングヘアを首の後ろで縛つているディエチ。その表情か
らはあまり感情が覗えない・・といふか、何かのほほんとした感じ
だけど、どこか興味深げに見ている気がする。

「Ｚ・11のウェンディっス! よろしくっス!」

赤紫色の髪を後ろで纏めたウェンディ。セインと同じで元気が有り
余つている様子。

てか、その?つて何よ? 名前は・・・イタリア語での数え方から
取つたのかな?。

まあ、その場合はウーノの場合、ウノ（UNO）になるけれど……

おっと、紹介しないと……

「蒼月竜哉だ。今日から皆の世話になる。解らないことだらけだが、よろしくお願ひします」

そう言って、頭を下げる竜哉。

「そんなに固くならなくていいっスよ。軽い感じで良いっスよ」「なら、ぐだけた感じで絡むよ」

笑い声が食堂に響く。

数分経つてから、竜哉は今まで疑問だつた事について尋ねる。

「……で？教えてくれないか？みんなの事についてさ」

「ああ、そうだつたな。我々は……」

話始めるチンク。

「戦闘機人だ」

「戦闘……機人？」

話は意外と早く終わった。

内容を纏めると、戦闘機人は、人体に機械を組み込んで身体能力を向上させ、更に『I.S』 インヒューレントスキル

と言う特殊能力まで使えるらしい。その能力は、個人によつて様々のようだ。

自己紹介の時言つてた『N.O.』つてのは、造り出された順番を示していく、数字の通りの姉妹関係なんだ。ちなみに、ウーノがN.O.1だそうだ。うん、納得。それと、N.O.2は潜入任務とやらで別の場所に居るらしい。どんな人なんか気になるが、居ないんじや仕方ない。

ふと魔法世界にサイボーグ

科学つておかし

くないか？と言う疑問が浮かんだが、口に出さない事にした。

そして、ポツリと感じたことを言った。

Side・チング

「ようは、サイボーグか・・・まるで、映画か何かみたいだな」腕を組んでポツリと呟く竜哉。

その表情は、どこか冷めた表情。

まるで、「それがどうした」とでも言つかのようなその表情に、私は隻眼となつた眼で、ジツと見つめる。

私以外にも何名か怪訝そうに見てくる。

見られている事に気付いたのか、竜哉が小首を傾げつつ聞いてきた。

「え？ あの、何か……？」

「驚かないのか？」

「ん？」

私が発した言葉に、思わず聞き返す竜哉。

「私達の事を知つて、怖がらないのか？ 言わば私達は・・・・・・・・人を殺す為の道具なんだぞ？」

私は竜哉にそう尋ねた。

私たちは、戦闘機人。

戦う為のみ存在して、戦う事しか生きれない

唯の道具。

それを尻目に、しばらく考え込む動作を見せる竜哉。

やがて、考えが纏まつたのか、ゆっくりと私の方を向き言葉を紡ぐ。
「確かに今聞いて知つた時は、驚いたさ。 そんな映画だかアニメだ
かのフィクションと思つていた事を聽けば」
ゆっくりと言葉を紡いでいく竜哉。

驚いただと？

それなら

「だったら、どうして

「でも怖くはない」

「

竜哉がそう声を発して、言いかけた言葉が雲散してゆく。

怖くない？ 私たちが、怖くないだと？

「どうしてつスか？」

私の気持ちを代弁するかの如く、ウーンディが竜哉に聞く。

「どうしてつて……」

途端に隼樹は、黙つてしまつ。

何故黙つてしまつのか理由がわからず、私は首を傾げる。いつまでも黙つている訳にはいかないと考えたのか、竜哉が口を開いた。

「…………どうしてだらうな

「は？」

竜哉の答えに、私はポカンとなる。

「テメツ ふざけてんじやねーぞー！」

「ふざけてなんかいなさい」

ノーグエが怒鳴りつける。

相変わらず、用心深いな・・・

だが、竜哉はそれすらも動じないで飄々と答える。

「オレの世界じゃ、戦闘機人なんて奴は居なかつたから、どう言へば良いのか解らねえ。

でも、オレは皆が戦う為の、殺すだけの道具だとせ、そりは思わな

い

ゆつくりと、吐露するかのように話す竜哉。

「殺すのなら、オレがスカリエッティと会つた時でも、今でも殺す事ができたはずだ

それが出来ていなければ・・・・・・・

一度口をつぐみ、一呼吸入れた後言い終える竜哉。

「まだ、心があるのかもな」

「心・・・・・だと？」

「我々に心があるのか・・・・・？」

「戦う為だけに存在する我らに？」

「頃垂れて瞑想する私、心なんてあるのか？」

「しかし、その瞑想は・・・」

「フン・・・・・ぐだらん」

「そう長くは続かなかつた。」

Side · others

「・・・・・何？」

竜哉は、険しい眼で、言いだした人物

トーレに向かつて睨みつける。

「平然とその視線を受けつつ、答えるトーレ。

「我々に心があるだと？」おどき話も良い所だ

「ほう。おどき話か？」

「そうだ」

「そうか」

竜哉の雰囲気が一気に変わる。抜かれた刀のような、鋭い空氣に。まるで、この雰囲気は、そう

「おどき話のように見えて、本当は真実かもな」

「真実か・・・・・」

口調は双方軽い、しかし、取り巻く空氣は重く、分厚い。

殺氣。

「ならば、私と勝負するか?」

「勝負?」

「そうだ。お前が勝てば、我々に心が有ると認めてやるつ」

明らかな敵意 それがトーレから溢れんばかりに放出されている。

それを受けつつ、スウと木刀を構える竜哉。

その木刀は、電球の光を受けて鈍く光る。

「こいよ。相手になつてやる」

竜哉が呟くように言つた。

そうして

そして、今にもぶつかり合おうとしたその時

「そこまでよ、トーレ」

女性の声が聞こえた。

。

「・・・・・ウーノか」

横目でチラリとウーノを見るトーレ。

「彼は大事な客人よ。怪我させるわけにはいかないわ」

険しい表情でトーレに言つウーノ。

どうやら、止めに来たらしい。

「・・・・・勝負は預かる」

「・・・・・ああ・・・・」

互いに牽制しつつ、ゆっくりと離れる2人。

内心ホツとしつつも、チンクはウーノに尋ねる。

「・・・・・それで、管理局の方は?」

「まだ此方には気づいていないようね」

「管理局・・・?」

竜哉が怪訝そうな表情を浮かべる。

「なあ、管理局って

」

「私が説明しよう。管理局の裏についてね」

そう言いつつ、一ヒルな笑みを称え、スカリエッティが白衣を揺らし、現れた。

裏？ 表ではなく？

そう、裏だ。管理局といつ組織のね。

裏、か。どこの組織でも、変わらないな・・・

フフ・・・ そうかね？

まあ、組織なんてそんなものだろ。それで、何を見せてくれるんだ？

言つただろう。管理局の裏と。

本当か？ 嘘偽りではないだろうな？

残念ながら「真実」だよ。

最初に言つておくが、今から見る映像は至極、不愉快極まりないものだ。気分が悪くなつたら、すぐに退室することをお勧めするよ

何、ある程度は体制を持っていると自負している。ちつとやそつとでは吐くよくな輩じゃないよ

それは、これを見てからでも言えるかね？

そうして、ス

カリエッティは竜哉に見せた。

映し出されたのは、地獄。

生体実験に、培養液に入れられたナニカ。

泣き叫ぶ子供や女性、男性、動物達。

気にもせずに実験を繰り返す研究員達。

「・・・・・・・・・・・・」

その光景を険しい眼で眺める竜哉

「大丈夫かい？」

「・・・・・前言撤回。 やつぱり少しキツイものがあるな」

そう言って、スカリエッティの方を向く竜哉。

少しだけ、額に脂汗が見える。

管理局は、魔法という力を容易て次元世界を管理している

「・・・・・何だって？」

それを聞いて、竜哉は顔を俯かせる。

「これが、魔法？ これが、正義？」

「・・・・・竜哉？」

チングが心配して駆け寄ろうとしたその時、

「ふざけんなッ！」

激昂した。

声は辺りに響き渡り、ビリビリッと空間を痺ませる。思わず、下がるチンク。

「何が「管理」局だ？　自分の世界すらも「管理」出来てない奴らの集まつた分際で！」

その言葉を聞きつつ、スカリエッティとはじめナンバーズは恐怖の表情を浮かべる。

その眼に宿るのは、殺意と憎悪　そして・・・
全身から溢れる憤怒に。

今の彼は、化け物のようだった。
今の彼は、そう・・・

鬼。

生きとし生ける物全てを喰らう鬼

他に例えるモノがあるのだろうか？

身体から、心から怒り、猛り狂うその姿に。

数分経つて、竜哉は漸く落ち着きを取り戻す。
そうして、しばらく考え込むかの様に眼を閉じる。

「スカリエッティ・・・」

「ん？」

スカリエッティは目を向ける。

「オレア決めたよ

「何をだい？」

呟くよつこ、話し出した竜哉に耳をそば立てる。

「お前らの計画に協力する」

「協力？」

「ああ。だが、唯の協力ではない

瞑想するかの」とく眼をつむる竜哉。

「管理局を・・・・・・・・・・・・

スウ、と眼を開き、言の葉を紡いだ竜哉。

ニヤリと笑いながらその眼は、

「ヒネリ潰す」

どじこまでも、暗く、冷たい瞳だった。

紡がれたのは、一つの決意。

決意は心中に留まり、これから先未来への道の追い風となる。

長く、険しいその道へと。

いつも、 晩 零です。

活動報告にも書きましたが、更新速度が遅くなる＆感想欄の書き込みを「制限無し」に変更してみました。 もつとも、荒らし等が多ければ今まで通りに「ユーザーのみ」に戻しますけどね。 皆様、悪しからず! 了承ください!

次回はキャラ紹介を挟んで、番外編を行つてから本編に向かう予定です。

そりで不定期になりますが、次回もお楽しみに!

キャラ紹介 翔ver・(前書き)

翔のキャラ紹介です。

6/23 大幅に修正しました。

キャラ紹介 翔ver.

性別：男

一人称：俺

誕生日 6月8日

年齢：19歳

身長：168cm

体重：56kg

髪型：茶色がかつた黒髪短髪

眼の色：明るい空色

性格：基本気さくで明るい性格かつお人好しなムードメーカー、滅多なことでは怒らない。

「運動バカ」というイメージを持たれがちだが、実は頭は良い。が、性格が猪突猛進タイプなので余り知られていない。

悩み：小さい背丈と増えない体重（本人曰く、「もつとガッシリとなりたい」らしい・・・）

デバイス：?????

好きなもの：甘すぎず、辛すぎない食べ物、料理。

嫌いなもの：大切な仲間が傷つくこと、悪、極端に甘い・辛い物。

趣味：努力・鍛錬・体を動かす。

座右の銘：「質実剛健」

所属：?????

階級：?????

役職：?????

コードサイン：?????

魔法術式：?????

所持資格：大型バイク免許・普通自動車免許

レアスキル：?????

イメージCV 入野自由さん（キングダムハーツシリーズ・ソラ役

機動戦士ガンダム00・沙慈・クロスロード役）あくまでもイメージ。

備考：謎の白い球のせいでミッドチルダに飛ばされてしまい、機動六課にお世話になりつつも親友の蒼月竜哉を探している。 戦闘能力は高く、いざ戦闘になると「猛火」そのもの。ド派手かつアグレッシブに戦う。竜哉に勧められて一時期剣道・バスケをしていた。称号：『蒼き修羅』・・・彼が中学時代に付けられた称号、「ある出来事」がきっかけで竜哉と知り合い、無二の友人となる。

キャラ紹介 翔ver・(後書き)

次回は、竜哉編です。

キャラ紹介 竜哉ver・(前書き)

キャラ設定の竜哉verです。

6/23 一部修正しました。

キャラ紹介 竜哉ver.

蒼月竜哉

性別：男

一人称：オレ

誕生日 12月28日

年齢：19歳

身長：175cm

体重：63kg

髪の色：黒

髪型：肩より少し長いややセミロングを後ろで縛り、ポニーテール
にしている。

瞳の色：濃紺

性格：落ち着いた雰囲気を持つ青年。 クールで大人びた所がある
が若干天然。ヒトを弄くるのが好き、敵対する者には容赦が無いが、
親しい友人に対してはくだけた話し方になる。

悩み：何でも一人で背負いがち（翔曰く）、髪が長いせいか、女子
に見られがちな事。

デバイス：？？？

好きなもの：甘い物、料理、風雅を愛する。

嫌いなもの：「正義」を語る偽善者、正義の味方、極端に辛い物。

趣味：努力・鍛錬、絵描き、写真、

座右の銘：「質実剛健」

口癖「ヒネリ漬す」

所属：？？？

階級：？？？

役職：？？？

コールサイン：？？？

魔法術式：？？？

所持資格：大型バイク免許・普通自動車免許
レアスキル：？？？

イメージCV 岡本信彦さん（『とある魔術の禁書目録』（一方通行）青の祓魔師（あおのエクソシスト）奥村燐）あくまでもイメージ。

備考：謎の黒い球のせいでもミッドルダに飛ばされてしまい、スカリエッティやナンバーズ達にお世話になりつつも親友の天斗翔を探している。

・戦闘能力は非常に高く、彰以上の技を見せる。いざ戦闘になると「疾風」そのもの。荒れ狂う風の如く素早さを用いる。さらに、冷静かつ確実に相手を「ヒネリ潰す」戦いを行う。19歳にも関わらず飲酒するなど柄が悪い部分も見られるが本人は「酒は飲んでも煙草はやらねえ」と平然としている。一時期剣道やアーチェリー、バスケ、将棋を嗜んでいた。

称号：『黒き夜叉』・・・彼が中学時代に付けられた称号、「ある出来事」がきっかけで翔と知り合い、無一の友人となる。

キャラ紹介 竜哉ver・(後書き)

次回は、番外編で二人の過去についてです（予定）

もしかしたら、本編がある程度進んでから番外編を行うかも・・・

機動六課入隊！（前書き）

お待たせしました！

予定よりも随分遅れてしましました・・・

前話から約2ヶ月という遅筆ですが、これからも精進していくつもりです！

OP／EDが決定しました！ 詳細は、後書きをどうぞ！

時の流れと共に景色が流れしていく。

朝から昼へ

昼から黄昏時へ

黄昏時から夜へ。

太陽が沈み、月が辺りを照らしだす。

そして、星々が輝き始める。

そんな中、一つの白い光が夜空を駆けて行く。

それは、管理局の『エースオブエース』高町なのはの姿だった。

その背には、一人の青年の姿が。

同年代にしては、やや小柄な体格。 168はあるうか？

邪魔にならない程の短く茶色がかつた黒髪は夜風になびいている。明るい空色をした瞳は、どこか拳動不審になつてている。

「えーと・・・・

「ん？ 何？」

ポツリと声を発した青年 翔には首だけ向いて声を返す。

「いい加減降ろしてくれ」「駄目だよ まだ怪我酷いんだから」・・・・むう

降ろしてほしいとせがもうとした翔の声は、さらに重ねられたなのはの声によつて断念される。

因みに、これで5度目である。

「もう、後もう少しで着くからしつかり捕まつてて」・・・・・・・・

拒否権は無いとばかりに言つなのはに翔は仕方なく肯定の意を畳え、邪魔にならない程度にしがみ付き直す。

「（おいおい、勘弁してよ。 唯でさえビックリ）世界なのが解らな

いのに、いきなり変な一つ田口ボットに襲われて、拳句の果てに、同年代そこの女子におんぶされてんだぞ？」

内心翔は酷く参っていた。いきなり知らない世界に飛ばされたかと思いきや、ロボットとの戦闘、後に「時空管理局」と名乗る女性に出会い、現在進行形でおんぶされての飛行。

女性におんぶされるという男性から見て羨ましい限りの待遇であるが、等の本人は・・・

（何か・・・・めつちや・・・・恥ずかしい。アンンマンジやねーんだぞ！？ 何がどうして女性の背こしがみついでんの俺！？ というか何かもう・・・（

かなりハニッケになつていた。

元々、明るい社交的な性格なので女子と会話することはあつたが挨拶程度しかなく、別に親しい仲という訳でもなかつた。そして、「女性のおんぶ」という彼に取つて余りにも不測の事態に頭がオーバーヒートを起こし始めているのだ。

もつとも、彼自身は良く友人に恋愛関係やセクハラ染みた発言でからかつたりするが、この男、意外と自身の事は奥手なのである。

「（どうしようか、ちよつと手の所に何やら触れてはいけない感触の気配が・・・・・いや、もちつき・・・じゃない落ち着くんだ俺！）」うこう時は数えるんだって兄貴や竜哉が言つていた！

数えれば・・・・あれ？ 偶数？ 奇数？ 素数？ 何数えれば良いのか忘れたあああ！！！」

正解は素数です。

やばい、やばいぞ……」のままだと第3の脚が立つてしまつ

て「やらないか？」だの「アッター！」だのになつてしまつ。落ち着いて深呼吸して何事も無かつたかのようにポーカーフェイスをすれば良いのだ・・・・・

「あの、声出てるよ・・・・・・?

「え?」

THE・WORLD! 時は止まる・

「・・・・・・・・・・・・・・」

「（き、聞かれたあ――――!???)」

内心シャウトする翔。

背中からは大量の冷や汗が流れている。

「（ど、どうすれば!? まさか嫌われて地面に落ちて可哀想なトマトに!?)」

辺りに沈黙が支配する。

やがて、数分経つてから・・・

「も、もうすぐ着くからそれまで頑張つて!」

「お、おう! 頑張る!」

どこか慌てた様子で叫ぶなのはに翔は千切れんばかりに首を縦に振る。

レイジングハートがまもなく機動六課に着くと声をかけるまで、終始2人は赤面し無言のままでいた。

所変わつて、

「1)1)が、機動六課?」

「うん、そうだよ」

今の時刻は21:30

時空管理局遺失物管

翔となのはは、機動六課
理部機動六課。 その隊舎に居た。

「…………税金かけすぎだろ」

「あはは……」

白い眼で思つた事を口にする翔に乾いた笑い声を上げるのは。

「じゃあ、これから部隊長室に向かうからついてきて」

そう言つて歩きだすなのはにおずおずと翔はついていった。

「高町なのは一等空尉、入ります」

敬礼をし、なのはは部隊長室へと入つて行く。

それを横目で見つつ、ゆつくりと周囲を見つつ同じく中に入つてい
く翔。

「なのはちゃん、お疲れ様や。 そんでも君か……」

「お疲れなのは。 それで……彼だね？」

部屋には二人の女性の姿が。

一人は中央に鎮座する机に腰掛け、先ほど読んでいたであろう資料

から眼を離し、翔となのはに向き直る女性
やて。

茶色の髪をボブカットにし、ヘアピンで一部纏めている。

もう一人は、はやての近くに立つていた。

長い金髪を黒いリボンで束ねている若干スタイルの良い女性

フェイト・テスター・ハラオウン。

二人とも、共に茶色の制服を着ている。

「取り敢えず挨拶な。 私はハ神はやて。 一二、機動六課の部隊
長や」

「執務官のフェイト・テスター・ハラオウンです
一通りのあいさつを済まし、はやてがじつと翔を見る。

「じゃ、お名前、聞かせてくれるか？ ボク？」

ひしり

はやでが翔に対し放った言葉を聞いて、空気が凍つたような感覚をなのは達は覚えた。

数秒後、
ブルブルと震えながら彰が小さく言つた。

「え？」せやナジボク「19だよ・・・」は?」

「だから、オレ、19・・・・・」

「『アーティスト』？」

「そんな、ちつここのにか？」

チ
ン

驚きじつと見るなのは達三人。

さらに追い打ちをかける様に言つはやて。

それを聞いて、なのはとフェイトは、何かが切れる音を確かに聞いた。

そ、あるで言つてはならぬ事を目の前の新友が言つてしまつた
ような・・・・。

辯に前を一に回し、いなれにこの表情一語もなし方作7つ7つめに
が起こりそうだと一人は確信する。

「え？ 何やて？」

小さくしゃべる翔。だが言葉が良く聞こえない為、片手を耳に付けて、もう一度催促するはやて。
そして・・・・・

「・・・歯ア食い縛れエ・・・」このチビ狸がア！！」

修羅が現れた。

修羅と化した翔は木刀を手にはやってに襲いかかわうとするも、なの
はとフエイトに後ろから羽交い絞めにされる。

「離せ！ あのチビ狸 ギツタンギツタンにしてやるー。」

お、落ち着いて翔君！」

「……たよ！ ちやし事は恥ずかしくないよ。私にも小さい子

かいるから良く触る」

果だよ！！

「え？ そうなの？」

「キイイーンパツウウウウ！――――！　後で覚えてろおおおお――！」

その胸揉みしだいてやるううううう！」

「ええ！？」
「そんな・・・・・や、優しくしてね？」

「ハヤシさん!?」

もはやカオスと化した状況にも関わらず、追い打ちをかけ続けるはやで。

「何をそんなに言つとるんや。 事実やないけ（棒読み）」
「GU MON！ 大体「小さい」と言う事自体可笑しいのだ！ た
とえ小さくても出来ることだつてあるのだ。 大きくなくとも、小
さくても出来る事があるのだ！ 偉い人にはそれが解らないんだあ
あああ――――――！」

「落ち着いて！ 落ち着くの！」

THEM ALL!

・・・・・この後30分後、漸くして翔火山は鎮火するのであつた。

ハア…ハア…サニセヨウマシタ

はやでもからかわないて、話が進まなしから……

あにはんじめんなのはせやんスセイエセヤん「

惠ひれる様子無く翻々と謙るはやで
とい見ても謙る態度では無

い邊は後でOZONE HONEYにして決めて
お口にはつけない。

前を向くのに 翌日涼く薄着を脱り脱いだ

「翔君やつたな？」
君の元の世界何やけど・・・・・・

一拍置き、言ひづらひをひきぬけて。

「アーティストは絶対に『アーティスト』にならない。……とにかく、地獄が存在しない

んや

「・・・・・は？」

「「どうしたの？」はやて（ちゃん）？」

余りの衝撃に呆ける翔となのは、フェイド。

それを見つつ、はやてが話始める。

「並行世界・・・・・つて聞いたことないか？」

並行世界。

それは簡単に言えば「・・・」の世界。

「もしも」と思う数の分存在する無限の可能性。

例えば、もしもミッドナルダに魔法がなかつたら、もしも、翔が女の子だったら、

もしも、ミッドナルダと翔たちの世界が同一世界だつたら・・・・・・

無限に等しい程の多くの「可能性」が有るほど、「並行世界」は存在する。

異世界の場合は、住む種属や世界が異なる等があるが、元をたどれば、其れもまた、

「並行世界の一端」である。（と作者は考えてこる）

閑話休題。

つまり、翔達の世界となのは達の世界は「限りなく近いがどこか遠く異なる並行世界」なのである。

従つて、互いに干渉も接点も無かつたのだ。

数時間前に、翔が現れるまでは。

「だからと書いて、はやへりや。帰れないといつわけじや・・・・・」

「もちろん、局の方でも捜させど。せやナビ、翔君の居た世界と私たちの世界自体別次元の世界やから、世界の特定がちょっと難しいそうなんや」

「そんな・・・・・」

異を唱えるなはに肩をすくめて返事を返すはやて。その表情からは、疲れ切った様子を醸し出していた。

「だから、一応時空遭難者として、本局に身柄を拘束せることができるんやけど・・・・・」

「だが断る」

はやてが続けて言つた言葉に、翔が待つたをかける。

え・・・・・今なんて言つた?

断るつて・・・・・!??

「どうしてー? 元の世界が見つかるまで、本局で滞在できるんだよー?」

「確かに、けど俺はそっちで言つ漂流者なんだろ?」

「ようは・・・・・・・・・・」ここに俺の居場所なんて無い

その言葉に絶句する三人。

続けて言つ翔。

「居場所すら無いのに、どう生きてる? 何に頼れと?」

ま、あてはないけどなと自嘲じみて眩く姿に悲しくなつた。
どうして、そんなことを言うの?

何で、そんな寂しい眼をしているの?

「まあ、日雇いのアルバイトぐらいはあるだろうし、何とか食つていけるだろ。色々と世話になつたな。それじゃあ・・・・
踵を返して部屋から出でていこうとする翔。

待つて・・・・・いかないで・・・・・!

「居場所がないならここで働くへんか?
「・・・?」

立ち止まり、顔だけはやてに向ける翔。

呆けたような様子を出すのはトフロイト。

「「はやて（ちゃん）？」」

「どうじつ、意味だよ？」

「言葉通りの意味や」

一度区切り、じつと見つめるはやて。

「居場所が無いなら、作れば良いっしゃ一事や」

「はあ？」

「んな簡単に言える訳が「言えるんやで、これが」・・・」

「ま、ウチら六課の保護と嘱託ちゅー名目やけどな。 大体、アテも無いのに生きるつて事次第ちょい難しいで」

「六課に居る時は衣食住の保証付き。 任務にも出て貰う。 任務が終わったらちやんと手当ては出す。 ちよつとしたアルバイトってわけや」

「・・・」

「もひるひる、元の世界に帰れるよつとウチらも気力を貰へすで。

どや？ 悪い話やないやろ？」

「・・・だからといつて」

3人を見ながら、戸惑つた様子で話しだす翔。

「だからって、迷惑かけるわけにはいかないよ・・・。 第一そこまで」

「迷惑なんて思つていないよ」

「高町？」

「何時だつてどんな時だつて・・・キミの力になるよ」

「テスタークサ・・・」

「翔君」

最初はなのは、次はフェイト、そしてはやてからかけられた声に気づき、ゆっくりとはやての方を向く翔。

「困つて居るなら、誰かに助けを求めるべえ。 悩んでいたら、

人に、まあ信頼できる人が一番ええんやけども・・・聞いてもろ
ええええ。苦しい時は、泣きたい時は気にならないで泣けばええん
や。な？ 簡単やろ？」

「・・・・・チビ狸・・・」

しばらく考え込むしぐさをする翔。

そして、考えが決まったのか3人に向き直り、真っ直ぐと見やる。

「・・・・・解つた」

「ここで働かせて下さい」

「うん、ええお返事や」

「そんな固くならないでよ。 同い年だし」

「あ、それもそうか」

フェイトが発した声に翔がおどけて返し辺りに笑い声が響く。

「じゃ、先ずは魔力検査だね、デバイスは・・・・・

暫く考える仕草をするのは。

「アームドデバイスでいいかな。 そこからデータを取ろうか。 今日はもう遅いから、明日検査しよう。 模擬戦も兼ねて」

「解つた。 じゃあ・・・・・」

3人を見渡し、声を発する翔。

「じゃ、誰と戦えば良いんだ？」

「じゃあ、私と戦つて・・・・・」

「待て、高町」

入口から聞こえてきた声に一斉に入口を見る。

「話はヴィータから聞いた。 私にやらせてくれ」

桃色の髪をポニーテールにし、不敵な笑みを浮かべた女性。

シグナムだった。

機動六課入隊！（後書き）

如何でしょうか？

作者「全くこのスケベが！」

翔「いや、仕向けたのアンタだろ！？」

作者「今後は、翔と六課メインで執筆する予定です！」

OP／EDが決定しました！

OP：「UODE PRIDE UVERworld

ED：「汚れなき涙」 THE BACK HORN

模擬戦 v/s シグナム（前書き）

お忙しそうにお待たせしました。
遅筆…………何とかしないこと…………

あ、今回せやねんです。 PICOからの閲覧をお勧めします。

模擬戦 vsシグナム

ガキン！ ガツ！ ガツ！ ガツ！

幾度の刃の応戦が続き、剣戟の嵐は続く。

「ははっ！ 翔とやらー、本当に面白い奴だなお前は！ 柔軟かつ変則な剣戟！ 中々どうして、読みづらいーー！」

• • • • •

その剣撃の嵐を防ぎ、捌きつつ、シグナムは嬉々としてそう言い放つた。対する翔は特に反応する事無く上段から斬りつける。それから互いに連撃、打ち合い、防ぎ合い、切り結びを繰り出し応戦し、
防御する。

周囲が何時の間にか無言になつてゐる事に誰も気が付かなかつた。

始まりは、そう、昨夜に遡る・・・

「私が相手しよう」

かべた女性が入ってきた。

「シグナム、勝手に割り込んだらアカンよ」「すみません主はやて。 ですが、この者との勝負は私が」「・・・・・誰?」

「あ、翔君。」Jの人はシグナムはやての守護騎士なんだ」はやての注意に謝罪するシグナム。

その光景を横目で見つつ、説しけに眉をひそめる翔に、フェイトが説明をする。

が何用でここに?」

にべもなくそつ言葉を発するシグナムに呆れた表情を浮かべる翔。「通分……笑顔……」成陽庄「何……」

「貴様、騎士を愚弄するか

今にも斬りかかろうとするシグナムにはやてから待つたがかけられ

「やめやシグナム。翔君もその辺でしまいな」

「ですか主

「シグナム」

「クツ

フン

解りました

一人の態度にやれやれと思いつつはやでは口を開く。

今日は遅いから、明日模擬戦って事にしような。フォワードのみんなにも、ええ勉強にもなるやうし。シグナムも翔君もそれでええか?

「私からは何も

「俺からも」

一人の承諾を聞き、はやては笑みを浮かべる。

「ほな、明日つちゅー事で一先ず解散や！」

そして翌日。

時刻は9：00。模擬戦開始1時間前・・・

なのはに連れられ、訓練場の入り口へと足を運んだ翔。因みに、あの出来事の後、翔ははやてから指名された空いている部屋にて睡眠はとつてある。

興味深そうに辺りを見回し、少し落ち着きの無い翔の姿に苦笑しつつもなのははある人物を探す。

「シャーリー！」

「なのはさん！」

なのはの呼びかけに応じ、向こうから駆け寄つてくる茶色の髪をした眼鏡っ子の姿が。

気軽に話している様子からして、どうやら一人は知り合いの様子。「誰？」

「シャリオ・フィーノです。 気軽にシャーリーと読んでね」

挨拶を交じわう一人。

「シャーリー、デバイスは？」

「あ、ここに」

はい、と手渡されたのは、手のひらサイズの刀を模したキー・ホルダーような物。

シャーリーが言つにはデバイスの待機状態に当たるものらしい。

「簡易式だけど、一般の管理局員に支給されている品だから、ある程度は耐久性あるよ」

「どうも」

「じゃ、バリアジャケット（以下B）」展開してみようか こんな風に

「レイジングハート セットアップ」

「set up」

辺りに桃色の光が輝き、なのはを覆う。

光が止むと、胸に赤いリボン、白地に青いラインが入ったミニスカートと白いソックスの上に、前開きのアウトラストをついた姿のなのはが現れる。

「あれ？ あの時と同じ……？」

そう、その姿は、彼が初めてなのはと出会った時と同じ格好だった。

「そう！ これが教導用のアグレッサーモードだよ」

ニッコリと笑みを浮かべてクルリとその場で一回転してみるなのは。それを見て慌てて眼を逸らそうとする翔。

「じゃあ、次は翔君だね。大事なのは、Bの『イメージ』だよ」

「『イメージ』……」

そう咳き、少しの間眼を瞑る翔。

数分間経ち、イメージが纏まつたのかゆっくりと眼を開き右手を上げ、戸惑いがちに咳く。

「それじゃ……セットアップ」

「set up」

眩い光があたりに広がり、覆い隠す。

翔の姿は、赤紫色の半袖ジャケットに空色のインナー、左肩には一の腕を覆う位の防具、黒みがかつた茶色の七分丈のズボン

と動きやすさを重視した軽装な姿に変化していった。

「こんな感じか？」

Bのあちこちを見ながら翔はなのはに問いかける。

「うん、すごくカッコいいよ……」

「ホント……すごく良い……」

「…………」

なのはとシャーリーの絶賛する声を聞いて、ふいとそっぽを向く翔。

「別に、嬉しくなんかねーよ…………」

と、言いつつ顔は綻んでいる翔。

「ふむ、中々様になつてゐるぞ！」

あ シタナムさん

向こうからゆつたりと歩いてくるシグナム。
既にバリアジャケットを着用している。

「もう私は準備できている。早くしろ」

ヘレヘレ

そへ答へて
翔は訓練場内へと歩いて行った

一 む、どうした?

「なんでこんなことになってしまったんだ?」

「お前の実力を測るために決まっているだろ？」

アンテインが握られている。

— そうじゃなくてさ。なんで実力なんて測るんだよ？ 俺、測る

「…………」

「たとえば、高町のことは、主はやてや高町からも聞いている」

「それも偶然で……」

「偶然だとしても事実は事実だ。それに、お前にそれだけの力と技があるのであれば、それをコントロールできるよう導くのも我らの使命。それに、私もお前のような強者と戦つてみたい！」

そう言って、途端に目を輝かせるシグナム。

絶対最後本音だ・・・・・・

そう思つても、口に出すのはやめおく。

「じゃ、わつわとやつま・・・・・!?

「ブウン!――!

言い終わるのも束の間、いきなり斬りかかるシグナム。

「おつと・・・・・・・・

「!-?-?-!-?

しかし、翔はそれを唯身を捻つて避ける。

!-?-!-?-!-?

周囲の誰もがその行為に驚愕する。

「シグナムの初太刀をかわした・・・・・いや、見きつた?」

フェイトがポツリと呟いた。

「（シグナムの攻撃の速さは、私やなのはちゃん、いや、私らで一番速いフェイトちゃんよりも誰よりも一番速い。それを交わしたつちゅうのは・・・あの子・・・・）」

その言葉を横で聞きつつ、考え込むはやて。

「わーお、酷いな・・・・・いきなり斬りかかるなんて」

その交わした本人は眼を白黒させつつ問いかける。

「騎士様は名乗りすら上げずに斬りかかるのが礼儀なのか?」

鞘に收め、振り返りつつ口を開くシグナム。

「済まなかつたな。何、かわせていなかつたらこのまま一太刀で負かそうとしたのだが」

「ほう・・・・・おつかない事だね」

軽口を叩きつつも、眼は互いに笑っていない。

「さて、と……」

刀型デバイスを持ち、正眼に構える翔。
対するシグナムは八双の構え。

「機動六課、嘱託魔道師見習い 天斗翔」

「ヴォルケンリツターが将 烈火の騎士 シグナム」

「「いざ、尋常に……」」

「「勝負！」」

ガキイイイイイ！……！

そうして、騎士と青年はぶつかり合つ

た。

そして、冒頭へと戻る

「す、すごい……」

「ふええ……」

赤髪の少年、エリオ・モンディアルの発した声に、桃色の髪をした少女、キャロ・ル・ルシエが感嘆の声を上げる。

「ティア！ ちょっとティア！ 見てよあの子す」「こよー。」

「ううさい、馬鹿スバル！ 言われなくてもちゃんと見てるわよー。」

講義のボーナス問題

黄色い声に、

スバル・ナカジマの

煩わしく言葉を返す橙色の髪をツインテールで纏めた少女
ティアナ・ランスターが返す。

ティアナ・テンスターが返す。

「うん。…………」なのはせん、あの子で、一体…………」

シャーリーの発した声にならぬもジバと訓練場を見つめる。

ガキン！

ガガガガガ・・・・・

袈裟切り、突き、振り下ろし、振り払いと

ある時は順手、またある時は逆手と持ち方を変えて攻める翔。

対するシグナムは、両手でレヴァンティンを持ち臆する」となく応戦する。

「なのは・・・あの子、翔は、パワータイプ・・・じゃないね」
「うん、翔君のタイプは見たところ・・・」
フヨイトの問いに、なのはも頷きながら言葉を返す。

「「速攻タイプ」」

「素晴らしいな。剣道でもしていたのか？」

止む事無く続く剣戦の嵐の中、シグナムが声をかける。

「しかも、その型は・・・我流か？剣筋に一定とした動きが無い」

「そいつは、どうも。知り合いに、剣道を、やつてた奴が、いたもの、で」

突きから横払い、振り下ろしからの足払いとデバイスを打ち合いながら返す翔。

激しい剣戦に、少し息が上がっている。

剣道と聞いて、微かに眉を上げるもすかさず突きを繰り出すシグナム。

「私の初太刀を防いだのは褒め称えよ!。しかし、だからと言つて勝てる程私は甘くは無いぞ」

「へえ、そうですか。でもそんなの・・・」
グッと剣を持つ手に力を込める翔。

「やつてみないと解らないだろ!」

順手から逆手に持ち替え、近くのビルにジャンプし、三脚飛びをする。

そして、背後からの奇襲を図る翔。

だが

「まだまだ、甘いな」

「！？」

ドカアアアアアアアアアアアアアアン！――――――――――

ガツ！ ゴツ！ ドゴオオン・・・・・

「かはつ・・・・・」

渾身の力を込められた回し蹴りを食らい、数十メートル先のビルへと叩きつけられる翔。

壁に叩きつけられ、肺から空気が抜ける。そのまま、ずるずると床に座りこむ。

「なのは・・・・・」
「フヒイトちゃんも同じ・・・・・？」
「うん」
「せやな・・・・・あの子・・・翔君もよつ頑張ったけど・・・・・

「 」 「 」 () () シグナムの勝ちだね(やね) () () 「 」 「 」

意識が朦朧とする。

自分の視界も、薄らじとしか把握できな。

「 ゲホッ、 ゲホッ・・・・・・・・」

蹴られて壁に叩きつけられた影響で、辺りにまもつもつと砂埃が舞い、視界が悪くなっている。

翔自身も、B-11が裂け所々赤く染まつつある。

そこへ、近づく気配、ロシロシと響く呪音。

顔を上げずとも、誰のかはつきりと解つてゐる・・・

「 荒削りで良い動きを見せたが・・・・・」 ここまでだな「

両手でレヴァンティンを持ち、上段に構えるシグナムの姿。

無感情な声が響く。

「 さらばだ」

そう呟き、シグナムは振りおろしたレヴァンティン。だが

「 ・・・だ・・・な・・・・・・・・」

「 ?」

微かに聞こえた声に寸での所で止めるシグナム。

「 ま・・・・・つてない・・・・・」

顔を上げた翔の眼にはまだ

「まだ・・・・・終わつてない・・・・・」

勝利への希望が 残つていた。

「 ッ！—」

刹那

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアン・・・・・・

気付いた時には、自分の身体が宙に舞つていた。

蹴られた事に気付いたのは、そこからビルに叩きつけられた時。

何が起きたのか誰にも判らなかつた。

唯一・・・・・模擬選を行つていていたシグナムでさえも。

気づいたら、数百メートルも吹き飛び、ビルに叩きつけられていた。

「・・・・・・ぐつ・・・・・今・・・・のは」

驚愕の表情を浮かべるシグナム。

「魔力反応！」、これは……！

「どうしたのシャーリー……つてこれはー？」

突然の機械音に反応しモニターを見て驚くシャーリーに、やるやく驚嘆の声を上げるフロイト。

それに対し、なのは、はやては無言でシグナムが吹き飛ばされたビル、続いて翔が居るであるビルへと眼を向ける。

所変わつてシグナムは辺りには砂埃が舞い、翔の姿はシグナムからも誰にも判らなくなつていた。

「（早い……これではまるで……）」

「（10年前のテスタロッサ……いや、それ以上のスピードか・・・？）

まあ、今のテスタロッサや私にはまだ程遠いが。）」

数百メートル先に

眼前に見える翔と田が合ひつ。

「本当に」

久方ぶりの「強き者」に思わず

「高町は・・・・面白い奴を連れてきたものだ」

笑みを浮かべた。

轟！

一陣の風が吹き、砂埃が晴れる。

そして

シグナムの前には

一人の「武士」の姿。

身に着けていた服装はボロボロで所々額や身体から血が流れてしま
るが、以前よりも気迫が増している。

右手にデバイス、左手には炎で象られた剣。身体からは薄らと紫電が溢れている。

「（実体が無い？ それに、その刀……！）

「やうか……そういう事か

何かに納得してさらに笑みを浮かべるシグナム。

「…………さあ

微かに聞こえたその声は、低い。
それでも尚、ハツキリと周囲に聞こえ、
その眼は

「余り、時間も無い。」

「やうか、俺達の戦いを」

不敵に笑う

模擬戦 vs シグナム（後書き）

作者「いかがでしたでしょうか？」

翔「作者・・・・取りあえず遅筆を何とかしような 不定期だけ
れどもさ」

竜哉「・・・・俺の出番はまだか・・・・」

作者「・・・・善処します」

次回予告。

「行くぞ」

「模擬戦の結果は

「初めまして、スバル・ナカジマです」

「翔

天戸翔」

次回「模擬戦の結果とFW陣との触れ合い」

感想・指摘・アドバイスお待ちしています。

模擬戦の勝敗とFW陣との触れ合い（前書き）

お久しぶりです！

遅くなりましたが、どうぞ！

11/20 後書きに補足を加えました。

模擬戦の勝敗とFW陣との触れ合い

雰囲気が変わった

とシグナムは感じた。

先程とはまるで違う翔の雰囲気を肌で感じ、思わずレヴァンティンを握る手に力が入る。

シグナムの思惑をよそに翔はシグナムから目を離さずに、デバイスと左手に輝く剣を持ちかえた。

唯剣を持ち替えただけの行動にも、シグナムは注意深く見つめる。
(唯一刀流になつただけでは無いな・・・。あの剣から強い魔力を感じる。

それに、先程から感じじるこの感じ、久方ぶりに見る強者の霸気・・・

主はやて以前からの主に仕えていた時と同じ・・・
(だが、剣の刃を折ればどうということではない)

シグナムの思惑をよそに翔は唯じつと佇んでいる。

「・・・・・・・・・」

「行くぜ」

「んッ！」

「！？」

ガキイン！

一声発したかと思った矢先、シグナムに斬りかかっていた翔。
かろうじて防いだのは、今まで積んできた経験以外にシグナム自身

の「直感」があつてのことだろう。

内心冷や汗をかきつつ、チラリとシグナムは翔の右手を見やる。橙色をしたその剣はまるで焰のように輝いている。

「ぜやあ！」

「ふつ！」

上段から大きく振り下ろす翔。

それに対してもシグナムは、居合の形を取り、目を瞑る集中する。

「！」

カツと目を見開き、真横に一閃する。

翔は両手に持つた剣をクロスさせ鍔迫り合いにする」とで辛うじて防いだが、デバイスにはヒビが入つてしまつ。

鍔迫り合いになりつつもシグナムは違和感を抱く。

（何故だ？ 奴の右手の剣……一打ち合つている感じがしない『・・・・・・・・・・・・』）

まるで存在そのものが無いような……（…）

はつとなり、見やる。

「そうか、その剣……」

「あ、もうばれちゃいましたか？」

にやりと笑いながら言葉を返す翔。

その姿にシグナムも不敵に笑う。

「なるほど、そういうことか」

「ええ、この刀には実体が無い。 何故ならこれは……」

「魔力で出来た剣！？」

はやてからの説明にはとフュイトは驚愕し、声を上げる。

「魔力刃とは違うの？」

なのはからの問いにはやては少し思案する表情を見せ、ゆっくりと口を開く。

「魔力刃は大抵はデバイスを媒介にして具現化するんや。フェイトちゃんが良い例やね」

その発言にはやフェイト、周りにいるフォワード勢も納得顔を見せる。

近接戦用のフェイトのハーケンフォームではデバイスを媒体にし、鎌状の魔力刃を形成する為だ。

「どうやら彼はデバイスだけでなく・・・・大気中の魔力素と自身の魔力を媒介にして魔力刃を具現化した・・ちゅーことでええかな。シャーリー？」

「ええ、間違いありません。ですが・・・・」

「うん？ どないした？」

シャーリーは一瞬俯くと、ある事を伝える。

その言葉に、周囲は納得するも驚愕する。

「なるほど。確かに、それならある意味納得できる」

「でも、それでもそれを平気で行う翔は・・・・」

はやての言葉に返事をし、フェイトは模擬戦場を見やる。

袈裟切り、上段、と襲いかかるシグナムを相手に縦横無尽に動きまわりながら応戦する翔。

何時の間にか、先程の鍔迫り合いで折れたであらうデバイスを背中に帯刀し一刀流に戻つてゐる。

目線をはやてに戻し、フェイトが口を開いた矢先

「正直く・・・」

「規格外だね・・・・」

なのはがフェイトの言葉をくみ取る。

「せやな。でも・・・・」

はやてはじつと自身の守護騎士を見つめ呟くように言った。

「次で勝敗が決まる」

意識が飛びそうになるのを必死で繋ぎ止め、相手へと襲いかかる。

身に纏つたバリアジャケットは互いにぼろぼろになり意味をなしていない。

それは、互いに渾身の力で打ち合つた結果だった。

ガン！ キイン！ ガツガツガ・・・！

止む事の無い剣戟の応戦。

模擬戦開始からどの位経つのかさえ、彼 翔には解らずにいた。

唯一つ 眼前の敵を倒す事しか考えていなかつたから。横に大きく薙ぎ払つた時に、一瞬シグナムが顔を歪める。

翔はそれを見逃さず、すかさず脇腹に蹴りを入れ、一回転してからダツと居合の形を取つてシグナムに向かつて駆ける。

刹那 互いの眼が合つ。シグナムの眼は微かに見開いている。翔はそれを確認し、ニイと笑い、まっすぐシグナムへと迫る。

「これで・・・・・終わりだ！」

そう言い放ち、剣を薙ぎ払おうとした矢先に

ガクン！

と体が動かなくなる感覚が。

そして、翔は両膝をつき、地面へと倒れこむ。

その光景が翔の眼にはスローモーションのように動いていた。

あ
・
・
・
・
れ
・
・
・
・
・
?

何だこれ・・・・・力が・・・抜け・・・る・・・?

• • • • もう • • • • 少し • • • • なの • • • • に • • • •

サアアと砂が落ちるような音を立てながら、先程まで翔が手にしていた橙色の剣から魔力が雲散し、消えていった。

は

シグナムに鼻先まで後数センチの所だった。

時刻 AM11：38

一人の騎士と一人の青年の模擬戦は誰もが驚愕と恐れ、そしてわずかな安堵の中 終わりを告げた。

同時刻 模擬戦場 観客席

「・・・リイン、医療班の手配よろしくな」

「は、はいです！」

はやての発した声にリインは慌てて応対する。

「模擬戦はここまで。みんな、各自で今回の模擬戦の感想を報告書に書いて提出ね。それとスバ」

リインに指示を出し、なのはの声を後ろで聞きながら、はやはゆつくりと模擬戦場を後にする。

通路を歩くはやはますます思案顔を募る。

「（模擬戦で見せた魔力反応。わずかやけど、私やなのはちゃん」と同格に達してた・・・」

「はあ～あ。ほんまに、とんでもない子が来たもんやなあ～。後で罰として、なのはちゃんのおっぱい揉んでやろ」

軽い調子でそっぽやき、頭をかきながら、模擬戦場をチラと眺めて

はやては部隊長室へと向かつていった。

AM11:50

更衣室にて

模擬戦を終えたシグナムは、シャワーを浴びた後一人ベンチに座りこんでいた。

模擬戦自体はシグナムの勝利だといふのに、浮かない表情をしている。

そのシグナムの後ろから声をかける者が一人。

「シグナム」

シグナムが振り返ると、赤毛をお下げにした少女、ヴィータの姿。

「そら、タオル」

「すまんな」

投げ渡されたタオルを掴み、ゆっくりとした動作で汗をぬぐう。

うーむ、何とも口ひ「ふざけるな」 グハッ！？

「・・・何してんだシグナム。 急に天井目がけてアッパーなんかして」

「・・・いや、何やら訳の解らない電波を掴んだものでな。 それよりもヴィータ、

本局に行つてたんじやなかつたのか」

「本局の方はちゃつちゃと終わつた。 帰ろうとした矢先に、はやてから連絡があつたから急いで戻つてきたら・・・」
ジト目で見るヴィータにシグナムはふつと笑みをこぼす。
やれやれと言いつつ、ヴィータが口を開く。

「どうだつた？」

「初めてにしては・・・中々の奴だよ」

「カケルつったか？」
「まあ、そうだな。初めてにしては善戦したつて所か？」

まさか、舐めてたんじやねーだろ?」

シケナムは肩をほぐしつつ右肩に触れる。

（後少し）……………10cmすれでいたる……………
（薄ら、弱らしくうなめ）残つて二つ。

そこには薄らと塗られたよしが跡が残っていた

ゆくくりと瞼を開ける

半覚醒のままぼーっと周囲を見渡すと、辺りには薬品や空きビンが多く置いてある。

• • • • ?」

一六課の医務室よ

振り返ると、セリックの金髪をじっと見つめていた女性の姿が

「船の尖端」とはジャイアント

卷之三

「さあお甜健をりてお打たる井

「そつか、
莫疑哉で負けて
。。。

「セーブ。金ぐ、シグナムもやつ圖が

い子に・・・」

そう言つて、膨れた顔を見せるシャマル。

そんなシャマルに翔が尋ねる。

「俺、どのくらい眠つていたんですか？」

「大体6時間ぐらいね」

「そんなに！？」

バツと窓を見やると、辺りはもう薄暗くなつていて。

「随分と無茶をしたようね？ ここに運んできてからずっと眠りっぱなしだつたのよ？」

もうと膨れる翔にクスクス笑いながらシャマルは言つ。

「もう出て行つても？」

「ええ、良いわよ。 幸い、大きな怪我は無くて、魔力切れを起しあだけだつたから身体には何ともないわ。バイタルも正常よ」

「はあ、ありがとうございました」

礼を言い、医務室を後にする翔だつた。

模擬戦を終え一人歩く。

やや俯き歩く翔の心中には、無様に負けた敗北感と、言いようのない高揚感が入り混じつていた。

小さくため息をつき、何か食べようと思い歩こうとするも、食堂の場所を知らない事を思い出し踵を返す。

途方に暮れて二度目のため息ついたその時

「あ、いたいた！ あの人だよティア！」

「うつさいバカスバル！ 耳元で大きな声を出さないでよー迷惑でしょー？」

「でも、ティアナさん。さつきからあの入右往左往してますけど・

「何が困っているのでしょうか?」

一
キニケル

はたと立ち止り、頭上を見上げると先程の模擬戦で観客席にいた少女達の姿が見えた。

- おしゃべり

「あ、これはち気づいたよティア！」——ん——ちま——「」「ううスバル！ そんな怪しき笑顔がド——にああの……？」

一
え
え
」

「そうですよ。初対面の方に対しても、…」

「あのー」

「……………」

「ティアも冷たい」

「もしもーし

「抱きつくんじゃないわよ。 こんのバカスバルー

「あ、あのお二人とも！」

微かに聞こえた声にヒタツとジザれ合いを止める4名

そのまゝ、ぐりと陛下を見下すと「ハハハ震えたから佩く翔の姿が。

すう、と大きく息を吸つて翔は

「あれ、でないで、」トトロが

噴火した。

それから30分後・・・
階下へと場所を変え・・・。

「「「「申し訳ありませんでした」「」「」「

「ん。 ようしい」

そこには、土下座をする勢いで頭を下げる4人の少年少女とそれに対し腕組みをしながら見下ろす翔がいた。

「そういや、まだ俺皆の名前聞いていないんだけど・・・」

その言葉を聞いて、フォワード陣の自己紹介が始まった。

「スバル・ナカジマ一等陸士です！」

一番最初に、元気良く挨拶をする青髪でボーグイッシュな子、スバル。

「同じく、ティアナ・ランスター一等陸士です！」

橙色の髪をツインテールにし、しつかり者といった印象を醸し出す女の子、ティアナ。

「エリオ・モンディアル三等陸士です」

「エリオ・・・モンディヤル？ 最近の子は進んでいるなあ・・・」

「モンディアルです！」

翔の軽いボケに対し、両手を振つて否定するのは赤髪の男の子、エリオ・モンディアル。

「キ、キヤロ・ル・ルシエ三等陸士であります！」

少しビモリながらも紹介を終わらせたのは桃色の髪をした子、キヤロ。

「俺は天戸翔。 いつち風に言つと、カケル・アマトかな？」
ややこしいなあ、と苦笑しつつ頬をかく翔。

それを見て、ティアナが口を開いた。

「あの、天戸さん「翔」……え？」

「……翔で良いよ。名字だとちょっとむず痒く感じるんだ」

微笑をたたえながら、そうFW陣へと言つ翔。

「では、翔さんと。翔さんは何の？」

「さつきの翔さんの模擬戦すごかつたじゃないですか！　あの右手に持つた剣つて一体何なんですか！？」

「…………スバル」

「え、何ティアつて何で頭持ち上げているの？　普通人間の頭つて持ち上がらな……痛い痛い痛い！！」

「…………何時もこんな感じか？」

アイアンクロ^ルをスバルにかけるティアナを眺め、どこか遠い目をし、エリオとキャロに声をかける翔。

「あ、あはははは……」

声をかけられた二人は唯乾いた笑い声を上げるしかなかつた。

「えーと、ティアナ……さん？　何か俺に言つ事があつたんじやないか？」

「テ、ティア～。呼ばれているよ～」

「…………はあ」

渋々とアイアンクロ^ルを解き、翔の方を向くティアナ。

その背後でスバルが「頭が……頭が～！」と呻いているがお構いなしのようだ。

「翔さんは何のために六課に？」

ティアナの問いに腕を組んでう～むと考える仕草をする翔。

「俺はそつちで言つ次元漂流者つて事もあるけど……。そうだな」

一旦言葉を区切り、窓からの風景を見つめる翔。

「友達を……探すために」

見つめることを止めずに、翔ははつきりと言葉を出す。

「お友達を……ですか？」

エリオが近くに寄り、翔の方を向きつつ言つ。

「ああ」

それに対し、大きく頷きながら返す翔。

「見つかると良いですね。お友達が「エリオの反対側へと移動したキャラが」」**「**笑いながら翔を見上げる。

その言葉を聞き、一ヤリと笑いながら未だに風景を眺める翔。

「見つけるぞ、絶対に - - - - - 」

「（童哉、待つてろよ）」

翔の眼の前には、幾千の星が広がる満天の星空が広がっていた。その星空から一つ、流れ星が落ちた。

同時刻

とある研究所 第4闘技場

「・・・・・こんなモノなのか？」

「ぐつ・・・・・」

そこに広がっていたのは、戦場。いや、戦場だったと言つべきか。

周りには、女性が数名地面に伏せられた状態でいた。その中心には、やや長めの黒髪をした青年の姿が。

かすり傷一つ無い彼は、周りを見まわし、近くにいた女性を見つけ、一言呟く。

「・・・・・興ざめだな」

そつ言い放ち、右手に持っていた剣を振りおろそうとしたその時

!

「待つてくれ！」
バタンと音がし、叫ぶ声がした。

ガキンと甲高い音を上げたのは青年の持つ剣。

足元にいる女性の右頬から 5こさずれた所に切っ先があつた。ゆつくりと振り向くと、ぜえぜえと息をしているものの此方を見据える、白衣を纏つた紫色の髪をした男性とウエーブがかかつた薄紫色の髪をした女性がいた。

「君の手助けは幾らでもやろう。だから、娘たちは・・・」「ああ、死んではいないし殺すつもりは無いから安心しろ」少しやり過ぎたけどな。と彼はニヤリと笑う。
「さつきの話だが・・・まあ、手伝いはしてやるよ」

「本当かい？」

「助けてもらつたお礼もあるしな」「・・・意外と律儀だね君つて奴は」「褒めるなよ」

軽く言葉を交わした後、剣を納めて青年は出口へと歩いて行く。
「じゃ、オレは部屋に戻るから」

軽く手を振り、歩き去ろうとした矢先に、女性の口から言葉が漏れだた。

「あなたは一体何者なんですか 竜哉さん」

その言葉にはたと足を止め、振り返る男

竜哉。

そして、不敵な笑みを浮かべて言った。

「何、少し善悪の考えがシビアな・・・普通の学生さ」

模擬戦の勝敗とFW陣との触れ合い（後書き）

いかがでしたか？

ここでちょっと補足をば。

賛否両論あるかも知れませんが、最後の竜哉の描寫は今後の展開の為にわざとそのような描寫にしました。もちろん、翔也です。また何故そうなったのかは今後明らかにするつもりです。

次回もお楽しみに！

感想・意見お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5168s/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 2人の青年

2011年11月20日16時41分発行